

第1編 わが国の成り立ち

第1章 建国の由来

1 式年遷宮にみる日本文化の伝承

平成25年10月2日午後8時、約3,000人の参拝者が見守るなか、62回目の伊勢神宮式年遷宮「遷御の儀」(天照大神の御神体を旧殿から新殿へ遷す儀式)(写真)が執り行われました。暗闇と静寂のもと「カケコー、カケコー」と鶏の声をまねた神職の声に続き、勅使が「出御(シュツギョ)、出御」(出御の時刻には、天皇が皇居の神嘉殿の前庭から伊勢を拝礼)と唱え、たいまつ(たいまつ)の火に包まれた御神体の「八咫(やた)の鏡」(大御神の和魂(にぎみたま)の御光が八方に光り輝く象徴)がゆっくりとした列の中で運ばれていきます。



式年遷宮(遷御の儀)

この伊勢神宮式年遷宮は、飛鳥時代の天武天皇が定め、持統天皇の治世の690年に第1回目が行われたものです。その後、戦国時代の120年以上の中断及び幾度かの延期はあったものの、この幻想的な姿は、約1300年にわたって営々と受け継がれてきています。

20年に一度の「式年遷宮」を繰り返しつつ、その姿を太古の様式のままに現代に至る伊勢神宮の歴史は、まさに日本文化の根源といえるものであり、わが国が続く限り未来永劫に受け継がれていくべきものです。

そして、この伊勢神宮の姿は、歴史教育の原点となるべき「我々が住む日本という国はいつから始まり、どのようにして形成されてきたのか」という問いを紐解く、貴重な端緒の一つとなるものではないでしょうか。

2 神話が語る建国の由来

世界各国では、それぞれの民族の遠い祖先が伝え残した逸話や神話があり、それらが育った風土によって、思想文化の根源となっていることを子供たちに教えています。われわれの先祖は遠い昔から、温暖で四季の変化に富む天地の恵みに感謝し、農業を中心とする産業・文化を育て、米を主食として大自然と一体になり、太陽をお日様と呼んで、一切の生命のおおみ親と仰ぎ、私達日本人が住む国を「日の本」と言ってきました。

そして、人の世も大自然もすべて一つの家と思ひ、慈しみあつてきたのであり、これがすなわち**八紘一宇**(はっこういちう)の精神であり、日本文化の最大の特徴と言えます。

わが国の成り立ちは、古事記、日本書紀、風土記などに神話の形で書かれており、これらは、古代の人々が、自分たちが住む国土の自然や社会の成り立ちを、古くからの信仰なども取り入れながらまとめられたものであり、一貫した物語として

八紘一宇

世界を一つの家のように和合させること。神武天皇(初代天皇)の大詔(次章1項参照)のなかにある「八紘(はっこう/あめのした)を掩(おお)ひて宇(いえ)にせむ」に由来する。「天の下では全ての民族は平等である。天下を一つの家のようにしよう。」という道義的な意味の言葉である。

宮崎県宮崎市にある平和台公園には、高さ36m余りの「八紘一宇の塔/八紘之基柱(あめつちのもととはしら)」があり、現在では「平和の塔」と呼ばれている。

大和朝廷の始まりにつながっています。

古事記は、第40代**天武天皇**の勅命によって編纂が行われました。天武天皇は、朝廷に仕える諸家に伝わっている諸々の記録に誤りがあることを憂慮され、これらを整理し、見解を統一させて我が国の政治の基本とし、後世に伝えたのです。

天武天皇の舎人（側に仕える者）に、生まれつき聡明で一目見ただけで口にだして音読し、一度耳にしたことを忘れない能力をもつ**稗田阿礼**（ひえだのあれ）という者がいました。天皇は彼に命じて、諸家に伝わる記録を誦習（しょうしゅう）させていました。

その最中に天武天皇は崩御されましたが、第43代**元明天皇**は、**太安万侶**（おおのやすまろ）に命じて、稗田阿礼の誦習したものを、今度は記録として書き残させたのです。

太安万侶は、漢字を用いて記録するのに苦労しながらも、わずか数か月後に完成させ、元明天皇に献上しました。この歴史書を古事記といいます。

この古事記によると、天地が初めてあらわれたとき、天上の高天原（たかまがはら）で男神のイザナギの命（みこと）と女神のイザナミの命（みこと）が夫婦になって日本列島を産み、イザナミの命が亡くなった後、イザナギの命が川で禊（みそぎ）をしたときに、皇室の祖先とされている太陽神である天照大神（アマテラスオオミカミ）と弟のスサノオの命が生まれました。その後、スサノオの命は地上に降り、八岐（やまた）の大蛇（おろち）を退治した時に、大蛇の腹の中から一本の剣が出てきたので、この剣を高天原の天照大神に献上されました。この剣を「草薙（くさなぎ）の剣（つるぎ）」といいます。スサノオの命は、天照大神の和魂（にぎみたま）の御光をこの世に現す知恵と力の神様であったのです。

その後、スサノオの命は櫛稲田姫（くしいなだひめ）を妻として迎え、世の中の一番の土台となる「家」づくりをされたのです。そして、やがてその子孫である特に優しく情け深いオオクニヌシの命が地上を治めましたが、高天原では、天照大神の孫であるニニギの命に地上を治めさせることに決まり、高天原からの使いの神とオオクニヌシの命との話し合いの結果、オオクニヌシの命は「やはりこの国は、天照大神の御子孫に治めていただくべきだと考えます」と申し、国譲りに同意します。

天照大神は、ニニギの命を日向の高千穂にお降（くだ）しになる（天孫降臨）にあたって、天照大神の和魂の象徴としての「鏡」

と、子孫の弥栄（いやさか）をお守りになる「勾玉」、知恵と力の象徴である「剣」の三つの神宝（三種の神器）を賜わるとともに、高天原のまつりの庭の稲穂を授けます。

この「三種の神器」は、今日でも、代々の天皇の御位（みくらい）とともに永遠に受け継がれることになっています。

天照大神の孫であるニニギの命か

三種の神器

八咫鏡（やたのかがみ）：天照大神の岩戸隠れの際に、岩戸の前の木に掛けられた大きな鏡。そこに映った御自身の姿に興味を持たれたところ、外に引き出され、世の中が再び明るくなった。

八咫瓊勾玉（やかさにのまがたま）：岩戸隠れの際に、八咫鏡とともに岩戸の前の榊の木に掛けられた大きな勾玉。

草薙剣（くさなぎのつるぎ）：スサノオの命がヤマタノオロチを倒した際、その尾から出てきた剣。一説によればもとは**天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）**という。後に、ヤマトタケルの命に授けられ、命が草原で賊の放った火に囲まれた際に、この剣を使って周囲の草をなぎ払って危機を脱した。

ら三代後に、カムヤマトイワレヒコの命（神武天皇）（写真）、お生まれになります。この方は、この国を治めるために東へ東へと進み、多くの苦勞を重ね、各地で「徳」をもって平定し、ついに大和の橿原（かしはら）にお着きになり、「まっりごと（政治）」（権力や武力をもって支配するのではなく、徳をもって心服させる）を始めることになります。これが大和朝廷の始まりです。

そして、古事記に書かれた「国譲り」の神話には、話し合いで物事を決めるということの重要性と勝者は敗者に対して、その功績を認め、名誉を与え、魂を鎮めるという伝統が、古代日本人としての理想的な政治のあり方であったことを、読み取ることができるのです。

また、わが国の武士道精神の根幹にあるものも、勝者が敗者を敬うという古代日本人の精神であったのです。この「敵を敬う武士道精神」は、明治天皇の御製、「国のため あだなす仇は くだくとも いつくしむべき 事な忘れそ」のなかに象徴的に示されております。

敵を慰霊する精神は、947年（天曆元年）、朱雀天皇が朝廷に反乱を起こした平将門、藤原純友らの一党を供養したことに始まり、わが国の近現代史においても様々な場面で発揮され、敵を慈しみ、讃える心は歴代の皇室の中に脈々と受け継がれてきたのです。



初代神武天皇（弓先にとまった金鷄が輝き、敵を眩惑している）

第2章 日本の国柄

1 神武天皇の大詔（おおみことのり）

前章で述べたように、日本という国は、神話の世界を抜きにして語れないのであり、天照大神の神勅によって、天孫ニニギの命が地上に降臨され、その曾孫にあたる神武天皇によってつくられた国なのです。神武天皇の即位から始まったわが国の歴史は、125代今上天皇に至るまで絶えることなく受け継がれてきた皇室の歴史とも言えます。このような歴史形態は世界でもわが国だけであり、これがわが国の「国柄（くにがら）」であると言えます。

わが国の国柄の本質を示すものとして、「神武天皇即位の大詔」があり、この中に、国を治めるための基本が次のように述べられています。

「神武天皇即位の大詔」（抜粋）

「・・・苟（いやし）くも民に利（かが）有らば、何ぞ聖（ひじり）の造（わざ）に妨（たが）はむ。まさに山林を披（ひら）き払ひ、宮室（おおみや）を經營（おさめつく）りて、恭（つつし）みて宝位（たかみくら）に臨みて、元元（おおみたから）を鎮（しず）むべし。上（かみ）は乾靈（あまつかみ）の國を授（さず）けたまひし徳（みうつくしび）に答へ、下（しも）は皇孫（すめみま）の正（ただしきみち）を養ひたまひし心（みこころ）を弘（ひろ）めむ。然（しこう）して後に、六合（くにうち）を兼ねて都を開き、八紘（あめした）を掩（おほ）ひて宇（いえ）にせむこと、亦可（またよ）からずや。」

この大詔の意味するところは、「天皇は、国民を常に大御宝（おおみたから）と思い、国民の利益を優先するのが聖の道である。天皇は、天照大神から授けられた徳に答え、国民は、天皇の徳を授かりながら、正しい道を養う心を身につけなさい。こうして、国内がまとまり、世界が家族のように結ばれば、喜ばしいことである。」ということでもあります。

この「天照大神から授けられた徳に答える」といった謙譲の態度は、歴代天皇に受け継がれ、即位のときに行われる大嘗祭（だいじょうさい）は、天照大神と一体になり、徳を授かる儀式なのです。

2 今に続く男系天皇の流れ

125 代に及ぶわが国の天皇の歴史の中で、何度か皇統断絶の危機がありました。我々の先人たちは男系維持のため、さまざまな知恵を絞ってこれを乗り切ってきたのです。今から約 1500 年前、第 25 代**武烈天皇**の皇嗣が絶えそうになったとき、10 代さかのぼった第 15 代**応神天皇**の男系子孫であり、5 世の孫にあたる男大迹王（おおどのおおきみ）を越前から迎えて、第 26 代**継体天皇**に即位していただきました。

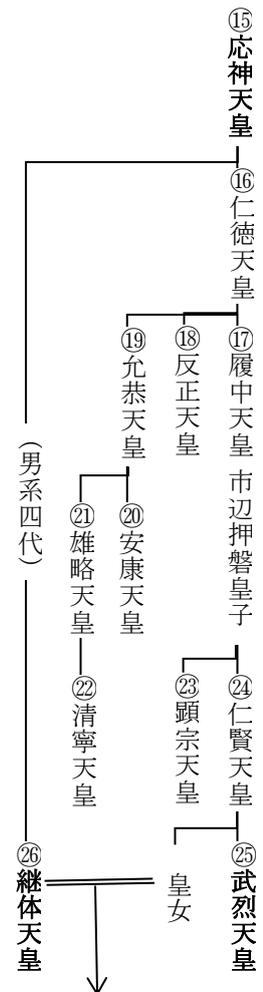
また、江戸時代には、病気がちの第 118 代**後桃園天皇**は 22 歳で崩御し、天皇には幼少の欣子（よしこ）内親王しか子供がいなかったため、急遽、東山天皇の男系の血を引く閑院宮家から祐宮（さちのみや）を養子に迎えました。祐宮は 8 歳で第 119 代**光格天皇**に即位し、欣子内親王は光格天皇の皇后になりました。閑院宮家は、新井白石の進言によって、男系皇位継承に備えるために創設された宮家であったのです。

また、皇統の歴史の中で、8 名 10 代の女性天皇がおられますが、これらの女性天皇は何れも父方が皇統に連なる「男系の女性」であり、皇位に就いたとき、既に配偶者と死別しているか、生涯独身か、第 109 代**明正天皇**のように、7 歳で天皇に即位されたあと、21 歳で皇位を 11 歳の弟、第 110 代**後光明天皇**に譲られており、本命と見なされている皇嗣に至るまでの中継ぎ役を果たされているのです。すなわち、女性天皇はあくまで中継ぎ役であって、女性天皇が配偶者を迎え、その子供が皇位継承者となるという例は一例もなく、女性天皇が存在した時期はあったものの、皇統は連綿として「男系」で継承されてきたのであります。

このように、神武天皇以来、125 代に及ぶわが国の皇統は一貫して男系で継承されており、父親をたどっていけば、最終的に日本建国の天皇である神武天皇に行き着くという万世一系の国柄といえるのです。

3 世界に誇る万世一系の国柄

わが国は天皇とともに生まれ、天皇とともに今日まで国のかたちを保ってきています。したがって、日本の伝統の中心となるものが天皇の存在であると言えます。



すなわち、世界に誇るべき日本の伝統の第一は、日本の国家形態が、2600年以上の日本国家の歴史において、ひたすら民を思う万世一系の天皇が国家最高の地位にあり、その時代々々の為政者の正統性を保証し続けたことにあります。

物理学者であるアインシュタインが大正11年に日本を訪れたときに、日本の国家形態について「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない。万世一系の天皇を戴いていることが、今日の日本をあらしめた。我々は神に感謝する。日本という尊い国を造っておいてくれたことを。」と言い、さらに「二千年以上にわたって、万世一系の天皇を戴いている日本の国家形態は、世界の奇跡である。」と述べているのです。

第3章 近代日本に至る国家の成り立ちと東アジアとのかかわり

ここでは、前述した日本の建国の由来と国柄を踏まえ、近代日本にいたる国家の成り立ちと東アジアとのかかわりについて、概観します。

1 大和朝廷による国家の形成

1.1 神話の世界から歴史の世界へ

古事記の中つ巻で述べられている、初代の神武天皇から第15代**応神天皇**までは、神の世と人の世の中間に位置し、両者を結ぶ役割を担っていると考えられます。すなわち、中つ巻は、神話としての性格を持っていますが、同時に、伝承されてきた歴史的事実を反映していると考えてもおかしくないのです。第12代景行天皇の皇子である**日本武尊**（やまとたけるのみこと）の熊襲征伐や東征、第14代仲哀天皇没後の**神功皇后**（じんぐうこうごう）の三韓征伐などの物語には、ある程度の歴史的事実の反映を感じさせるものがあります。これらの伝承は、大和朝廷を中心に数々の話し合いや戦いを経て、天皇の統治が九州から東北あるいは朝鮮にまで及んだ経緯を明らかにしています。

応神天皇が崩御され第16代仁徳天皇の御代となった四世紀半ばには、大和朝廷により日本は統一され、朝鮮半島にも影響力が及んでいました。

4世紀後半、朝鮮半島では、北部の高句麗が強くなって、半島南部の百済を攻撃してきました。もともと、貴重な鉄の供給地である半島南部と深い交流をもっており、このころ任那を中心に半島南部に大きな影響力を持っていた大和朝廷は、百済の求めに応じて朝鮮に出兵しました。高句麗は、百済の首都（現在のソウル）を攻め落としましたが、大和朝廷の軍勢の抵抗にあって、半島南部の征服は果たせませんでした。

1.2 日本人の和を尊ぶ気風の原点

6世紀になると、朝鮮半島では、東部の新羅が強くなり、日本の影響力の強い半島南部を脅かすようになります。そして、562年には、新羅が任那を滅ぼし、大和朝廷の朝鮮における影響力は失われました。その後の朝鮮半島の諸国は、6世紀末に中国全土を統一した隋に冊封（さくほう）され、朝貢国（ちょうこうこく）となります。

この時期に、日本では聡明な皇族出身の**聖徳太子**があらわれ、初めての女帝である第33代**推古**

天皇の摂政となりました。聖徳太子は、600年に隋に遣隋使を送り、大陸から優れた文化や制度を取り入れようとした。そして604年には「十七条の憲法」を定め、公のために働く役人の心構えや天皇を中心とした国家のしくみを整えました。特に聖徳太子が説いた人々の「和を以て尊とする」考え方は、その後の日本社会の伝統となり、今日においても日本人の誇りとなっています。また、この時代から天皇という称号が正式に使われるようになりました。

この聖徳太子の和を尊ぶ精神は、神武天皇の大詔の「八紘（はっこう／あめのした）を掩（おお）ひて宇（いえ）にせむ」（天の下では全ての民族は平等である。天下を一つの家のようにしよう。）の精神に通ずるものであり、わが国の建国以来の気風であると言えます。

1.3 大陸との交わりと律令国家の形成

7世紀になると、大陸では、高句麗遠征の失敗と農民の反乱により隋が滅び、唐が建国（618年）されます。唐は、隋の時代に確立された律令制度を引き継ぎ、強力な中央集権国家を作り上げ、最盛期には、中央アジアの砂漠地帯も支配する大帝国となり、朝鮮半島や日本などにも政治制度・文化などの面で多大な影響を与えました。

660年、唐は朝鮮半島南東部の新羅と結んで、半島南西部の百済を滅ぼしました。この時に百済からの救援要請を受けたわが国は、百済復興のため朝鮮半島に多くの兵を送り、663年には唐・新羅連合軍と半島南西部の白村江で戦いました。この戦いは、日本・百済側の大敗北に終わりましたが、そのときに百済の王族以下、多くの人々が日本に亡命し、帰化したのです。

この頃、わが国は、大化の改新（645年）により蘇我氏などの豪族中心の政治から天皇中心の政治への移行期にありました。大化の改新の中心人物であった**中大兄皇子**は、668年に第38代**天智天皇**として即位し、白村江での敗因を分析し、律令の整備と中央集権化を目指しました。

なお、百済滅亡後の朝鮮半島では、唐と結んだ新羅が半島北部の高句麗をも滅ぼし、さらに、676年には唐の勢力も排除して半島を統一することになり、わが国との関係は冷えていきます。一方、わが国と中国との関係は、朝鮮半島情勢の影響等で一時期冷え込みますが、遣唐使等を通じた交流が続けられます。

天智天皇の死後、壬申の乱（672年）を経て政権についた第40代**天武天皇**も中国の律令制度にならった国家の法律の制定と、国の歴史書の編纂に着手します。天武天皇のあと、皇后の**持統天皇**が即位して、改革を受け継ぎ、694年には、唐の都城制に倣い、飛鳥地方の大和三山に囲まれた広大な藤原京が建設されました。ここに聖徳太子以来の律令国家を目指す国づくりがほぼ完成することとなります。日本という国号が用いられるようになったのも、この頃です。

710年、第43代**元明天皇**は、律令国家にふさわしい都として、藤原京から奈良の平城京に都を遷します。その後、平安京（京都）に遷都されるまでの約80年間を**奈良時代**といいます。

8世紀の中頃から、貴族や僧侶の争いが激しくなり、第50代**桓武天皇**は、寺院などの仏教勢力が強い奈良を離れ、794年、京都に平安京を造営、遷都されました。以後、鎌倉幕府成立までの約400年間を**平安時代**といい、明治天皇の東京遷都までの約1000年間、京都が日本の都となったのです。

桓武天皇により、律令国家が立て直され、天皇の権威が確立し、皇位の継承が安定すると、一

方で藤原氏が他の貴族を退け、一族の娘を天皇の后とし、その皇子を天皇に立て、国政の実権を握るといふ摂関政治が行なわれるようになりました。

また、この時代に臣籍降下した天皇の子孫が、国司等として地方で勢力を拡大し、武士団を形成して自らの権利を守るとともに、天皇家を支える力となっていきます。後の平氏は桓武天皇の子孫、源氏は第 56 代清和天皇の子孫といわれています。

1068 年、摂関家と外戚関係にない第 71 代**後三条天皇**が即位し、摂関家の勢いをおさえて、みずから意欲的に政治の刷新を行いました。その後を継いだ**白河天皇**は、14 年間在位した後、幼少の天皇に皇位を譲り、上皇（院とも称する）として天皇の後ろ楯となって政治の実権を握るといふ院政を行いました。その後、代々の天皇と上皇の間でしばしば対立が生じるようになります。

2 武家社会の形成と大陸からの脅威

2.1 武家政治の始まり

1156 年、第 77 代**後白河天皇**と崇徳上皇の間で、激しい対立が起こり、有力な武士たちが二手に分かれて加担し、戦い（保元の乱）になりました。このような天皇と上皇の争いの解決に、武士が大きく貢献したことをきっかけとして、武士の政治への発言力が増していきます。

1159 年、力を付けた平氏と源氏の間で、朝廷を巻き込んだ争い（平治の乱）が起きます。この争いに勝利した平氏は「平氏にあらざれば人にあらず」というほどに権力を恣（ほしいまま）にし、その棟梁の**平清盛**は、武士として初めて朝廷の最高位である太政大臣にまで上り詰めました。しかし、その後、平氏は、後白河上皇と対立するようになり、朝廷の命を受けた源氏によって都を追われ、1185 年、壇ノ浦において**源義経**の軍によって滅ぼされます。

1192 年、源氏の棟梁の**源頼朝**は、朝廷から征夷大將軍に任命され、鎌倉に武家政治の拠点を置きます。これが鎌倉幕府であり、以後の約 140 年を**鎌倉時代**といいます。

2.2 元寇を撃退した鎌倉武士

13 世紀に入り、大陸ではチンギス・ハンがモンゴルの高原から興したモンゴル帝国が、疾風の勢いで、西アジアから中国まで、ユーラシア大陸に広大な領土を築きました。

モンゴル帝国 5 代目の皇帝フビライ・ハンは、大都（現在の北京）を都として、国号を元と称し、東アジアへの支配を拡大するため、日本を征服しようとし、1274（文永 11）年と、1281（弘安 4）年の 2 回にわたり、元・高麗連合軍が、大船団を仕立てて日本に襲来しました。連合軍は、対馬・壱岐を侵犯して略奪と残虐な行為を極めた後、九州北部に上陸しますが、日本側は、鎌倉武士の勇猛果敢な戦いにより、上陸軍を沿岸部で撃退して内陸には進ませませんでした。幸い 2 回とも「神風」とよばれる暴風雨が吹いたこともあり、元・高麗連合軍は日本侵略を諦め退散しました。この二度にわたる国土防衛戦を、文永の役と弘安の役、あわせて**元寇**といいます。

その後、中国では、元が北方に追われ、1368 年に漢民族の王朝である明が建国され、朝鮮では、李成桂が高麗を倒し、1392 年に朝鮮国（李氏朝鮮）が建国されます。

2.3 天皇親政への回帰と武家社会の再興

元寇のあと、鎌倉幕府の支配がゆるぎはじめます。そのような時期に即位した**後醍醐天皇**は、みずから政治を行う天皇親政をめざした倒幕の計画を進めます。その計画は幕府に発覚し、天皇は隠岐に流されますが、忠臣の助けにより隠岐から脱出します。その後、足利尊氏、新田義貞、等が朝廷に味方し、大軍を率いて幕府の京都における拠点である六波羅及び幕府の本拠地である鎌倉を攻め、1333年に鎌倉幕府を滅します。この翌年(1334年)、後醍醐天皇が京都に還御され、天皇親政を布くこととなります。これを**建武の中興**といいます。

ところが、1336年、建武の中興の立役者である足利尊氏が、京都に新しい天皇をたて、幕府政治再興の方針を明らかにしたため、後醍醐天皇は、吉野にのがれ、政権は京都(北朝)と吉野(南朝)に分立することになります。この分立した時代を**南北朝時代**といい、各地の武士も分かれ、約60年間にわたる争いの時代が続くこととなります。

1338年、**足利尊氏**は、北朝の光厳天皇から征夷大將軍に任じられ、京都に幕府を開きます。のちに尊氏の孫・義満が京都の室町で政治を行ったことから、この幕府を室町幕府といい、足利氏が將軍だった時代を**室町時代**といいます。3代將軍義満の時代が、幕府の最盛期となり、義満は南朝の勢いが衰えたのを見て、1392年、南北朝の合一を実現します。

3 武家による天下統一と天皇

3.1 武家同士の争いの時代

室町幕府は、3代將軍義満の死後、次第に衰え、守護大名の力が強くなっていき、1467年、將軍家の跡継争いに端を発して、有力大名である細川氏と山名氏が東軍と西軍に分かれて戦うという応仁の乱が起きます。応仁の乱を切っ掛けとして、従来の体制が崩れ、日本の社会が激しく変化する時代になります。社会全体に、身分の低い者が実力で上の者に打ち勝つ、下剋上という風潮が広がるようになりました。この下剋上の風潮に乗って、実力のある家臣や地侍は、幕府にたよらず、自らの力で守護大名を倒し、一国を支配するようになっていきます。

こうした領主を、戦国大名といい、彼らが各地でたがいに激しく争う**戦国時代**に入っていました。その中で、京都に近いという地の利を生かして頭角を現したのが、尾張(愛知県)の**織田信長**です。

3.2 天下統一への歩み

信長は、駿河(静岡県)の今川義元を破ってから、京都にのぼって足利義昭を將軍に立て、全国統一に乗り出します。その後、信長が義昭を京都から追放し、1573年に室町幕府は滅亡します。

信長は、1575年には、当時最強と言われた甲斐(山梨県)の武田の軍勢を破り、その翌年、京都に近い安土に、安土城という壮大な城を築きました。安土城の天守閣は、天皇が住む「清涼殿」と同じ平面を持ち、天皇を迎えるために作られたといわれています。しかし、信長は、1582年、家臣の明智光秀にそむかれ、本能寺で倒されてしまいます。

織田信長の全国統一の事業を受け継いだのは、信長の家臣であった**豊臣秀吉**です。

豊臣秀吉は、明智光秀を討った後、1583年、安土城を手本にした巨大な大坂城を建造します。このあと、秀吉は、朝廷から関白の位を得て、天皇の名で停戦を命じ、全国の大名を降伏させ、

1590年には、全国統一の事業が完成しました。

全国を統一した後、秀吉はかねてから中国の明を征服することを考えており、1592年、15万の大軍を朝鮮に送ります。しかし、朝鮮側の李舜臣が率いる水軍の活躍や明からの援軍などで、不利な戦いとなり、明との和平交渉のため兵を撤退することになりました。しかし、その後の明との交渉がうまくいかず、1597年、秀吉は再び14万の大軍を送りましたが、今回も苦戦を強いられます。そして、翌年には秀吉が亡くなったため、兵を引き上げました。二度にわたる朝鮮出兵により、戦場になった朝鮮は疲弊し、この出兵に膨大な費用と兵力を費やした豊臣家の支配はゆらぎはじめます。

3.3 天皇と征夷大將軍

1192年に鎌倉幕府が開かれて以来、建武の中興の一時期を除き、わが国では武家による政治が行われてきました。この間、天皇は直接政治を動かすことはありませんでしたが、武家社会の頂点にあった征夷大將軍は、代々天皇の勅命により任命されていました。すなわち、天皇はいかなる為政者よりも上位にあったのであり、征夷大將軍にとって、天皇は権力の正統性を付与する立場の方でありました。いかなる武士も、天皇にその地位を任じられ、またその地位に相応しい位階が授与されない限り、征夷大將軍として扱われることはなかったのです。

これから始まる江戸時代の徳川將軍達も決して例外ではありませんでした。

4 戦乱のない江戸 260年の平安

豊臣秀吉の死後、最大の実力者になったのが、**徳川家康**です。家康は、1600年の関ヶ原の戦いで豊臣側の対抗勢力を破り、1603年には朝廷から征夷大將軍に任命され、江戸幕府を開きました。

江戸に幕府が開かれてから約260年間、徳川氏が15代にわたって全国を治める**江戸時代**が続きました。この間、徳川幕府（將軍）と地方の藩（大名）との主従関係を基点とする幕藩体制が確立するまでの初期の一時期及び明治維新直前の時期を除き、国内の戦乱はなく、また、幕府の採った鎖国政策により海外との交流が限られた平和な時代でした。

わが国が、海外との交流を制限し戦乱のない平和な時代を過ごしている間に、欧米列強のアジア侵略が着々と進められていました。そのことに気づいた時、日本人は、近代化の必要性に目覚め、明治維新に向けて動き出すこととなります。

第4章 明治維新以前の欧米諸国のアジア侵略

前述のように、日本の近代化は、欧米諸国のアジア侵略の脅威に直面したことから始まります。ここでは、明治維新を考察するに先立ち、15世紀末頃から始まった欧米諸国のアジア侵略がどのようにして行われてきたかについて、年代を追って概観してみたいと思います。

1494年、トリデシリャス条約により、ローマ教皇の認可のもとに、ポルトガルとスペインが、地

球を二分割して征服しようとする計画が成立する。

1498年、ポルトガルのバスコ・ダ・ガマが、インド西南のカリカットに入港。

1515年、ポルトガルは、中国に進出する。

1549年、ポルトガル人の宣教師ザビエルが、日本に渡来する。

1557年、ポルトガルが、マカオを占領する。

欧米諸国が、武力を行使してアジアやアフリカ及びアメリカ大陸の原住民を征服するための大義名分として、次のようなローマ教皇の勅書があった。

キリスト教徒の異教徒に対する戦争の条件（ローマ教皇勅書の抜粋）

- 1 東洋各地やブラジルなどについては、救世主は未信徒を改宗させ、靈魂の救済を行うように命じ、自己の利害をかえりみない宣教師を派遣したので、彼らは布教地で優遇を受ける権利がある。彼らの言に耳を傾けなかったり、彼らを迫害したものに対する戦争は正当である。
- 2 アメリカ大陸の原住民については、野蛮な悪習を守り、それをやめようとしめない。こういう者の土地を占拠し、武力で彼らを服従させる戦争は正当である。

1558年、スペイン無敵艦隊がイギリスに敗れ、1600年には、イギリスが東インド会社を設立。インドを植民地支配下に置く。

1619年、オランダは、ジャワ島のバタビア（現在のジャカルタ）に進出。その後、インドネシアを植民地化する。

1819年、イギリスが、シンガポールを支配下に入れる。

1839年、清国の道光帝が、アヘン貿易の禁絶を断行する。

1840年、アヘン戦争勃発し、清国惨敗。欧米諸国による中国侵略の第一歩が始まる。

アヘン戦争は、イギリスが自国では決して輸入を許していないアヘンをインドで栽培させ、これを清国に押し付けることによって、揺らぎだしていたイギリスのインド支配の財政基盤を支え、同時に、イギリスの中国大陸への帝国主義的野望を満たした一挙両得の、まさに強引な戦争でありました。

アヘン戦争による清国の敗北は、日本に対しても深刻な衝撃を与えました。

1853年、ペリー艦隊が、日本に来航し、開国と通商を求めるアメリカ大統領の国書を幕府に対して手渡す。

ペリーの来航は、「太平の眠りを醒ます上喜撰（蒸気船）たった四杯（隻）で夜も眠れず」の狂歌が詠まれたほど、日本国民に対して天地を揺るがすほどの衝撃を与えます。

1854年、ペリーは再び来航し、幕府は、清国の轍を踏むまいと下田で日米和親条約を結び、下田と函館の二港を開港する。開港場における外人遊歩区の設定、必需品の供給、最恵国約款の承認を約する。同年、イギリスとロシアとそれぞれ和親条約を結ぶ。

1855年、オランダと日蘭和親条約を結ぶ。

1857年、イギリスが、インドでセポイの大反乱を鎮圧し、ムガル皇帝を廃止してインドをイギリスの直轄領とする。

1858年、幕府は朝廷の許可を得られないまま、アメリカの初代領事ハリスと日米修好通商条約を調印する。

この条約は、日本におけるアメリカ人の犯罪を日本側で裁くことができない、あるいは輸入関税等を完全にアメリカに管理されるという不平等条約でありました。同年、日蘭、日露、日英、日仏間でも同様の修好通商条約が結ばれます。

1861年、ロシア軍艦ボサドニックが対馬に来航し、半年間駐兵する。イギリスの介入によってようやく退去する。

このように、欧米諸国は、当初はキリスト教の布教を名目にして戦争を正当化するなど、徐々に征服地を植民地化するといった侵略政策を行ってきたのであり、幕末から明治にかけての日本は、北からはロシア、西からはイギリス、オランダなどの欧州諸国、東からはアメリカといった三方からの列強の武力脅威にさらされていたと言えます。

このころの朝鮮半島は、李氏朝鮮（1392年～1910年）の時代ですが、分裂と内紛に明け暮れ、崩壊寸前の様相を呈していました。当時の李氏朝鮮は、中国の属国（冊封国）であり、中国以上に儒教的な専制君主政治を行っていました。そこには、両班、中人、常民、奴婢の身分制度があって、特に、両班の横暴は目に余るものあり、下級の者に生殺与奪（勝手に命を奪ってもよい）の権利を持っていました。

一方、アフリカでは、十六世紀から十九世紀にかけて、1500万人以上の黒人が奴隷として、欧米諸国に売られた時代です。奴隷の数は、途中で死亡したものを加えると、この数倍の人数に及ぶといわれています。

このような中で、わが国は、アジアで最初の西歐的な近代国家への道を歩み始めることになります。

以上、「日本の建国の由来と国柄」について、その概要を述べ、「近代日本に至る国家の成り立ちと東アジアとのかかわり」及び「明治維新以前の欧米諸国のアジア侵略政策」について、概観しましたが、ここからは、本冊の主題である日本の近現代史において、「なぜ明治維新を行わなければならなかったのか」、「なぜ日清・日露戦争を戦わざるを得なかったのか」、「なぜ日韓併合を行わざるを得なかったのか」、「なぜ昭和の日本が戦争に追い込まれていったのか」、等々について、歴史上の出来事、そこに登場する人物などに焦点を置いて記述することとします。